写本

御茶之覚書

御茶之覚書

志川け方此方に
いにしへの利口弁舌さま〴〵なり
ともつきこゝろハ忘せこそのくなし
物志らくよそさまの紙の残ほとに人
身乃ほとをしりて我とあるハ也

数寄心ある此事

一 茶湯仕組の事ハ早天より重勝手に釜を
掛亭主客来の前より数寄屋の茶入大炭を
火におこして見合よきさかんに亭主答組あるし

一 長さ弐寸六分さゝのたけ二寸分中 中程
一寸九分元ハ壱寸三分あつさ三分さき程
次第にうすく　さゝのあつさ一分末角にハ
めんかけ

手本拵はすへ座乃寸方

一 石突乃おのかくおのゝやう石のかくの石
一 弐尺四寸あいハ残垂あり前石と突乃高さ
一 突ハ四寸高し守も高りをゆるあり見ハ
ひくさ突乃突乃かしわそく高さゝ突ハ
かく座乃此事なり

容器花入 樽木とび花器事氣残付る

一 籠掛よ鶴清る亭主様まく速ふ為る
両縁ハ竹のこ竺三る事 刀掛 手本に扇子ハ
掛入る常此ごとく

二膳大三膳大小容かをとる

一 上座入て床乃掛物 掛縁 節此釜見る
会法なり 抜中 柱の前へ上座居るなり
二ノ座入縁残見ん 抜床と上り にしの方に居る

三ノ客入りたらば二畳客の人上客それぞれ
居所の三畳客又床と上り口との間に居る
四畳客入戸きりて入る内に三畳客戸それぞれ
(寄) 四畳客床脇に居る
客入 亭主一礼捨炭計持出て灰かすり
出し 諸事の亭主会席出し来付けたり
たるしかど付月数ある能附たるに炭計
掛出るを見習

一 棚の羽をとり元にて環釜より下に置
二 羽にて掛釜を右にて釜の蓋を拭かけて
炭をとり掛羽を右に置りて右に置

入子なり

十 大炭一ツをふて色掛炭ば火箸ふてつぎ

黒炭の〻め能して白炭箸にて二ツ三ツづゝ

掛火箸右に持なり香箸炭たさ掛る色し

箸炭ごとく此流めてくなくいなどして結

此時客分香箸に見る掛なり

炭乃ん持の事

大釜よハ大炭小釜よハ小炭なり

炭は法[illegible]乃[illegible]

黒炭と黒炭十文字此事

白炭同前

大炭よ丸土壇へ丸鈍の事

角〻へ丸鈍角此灰分ず次す

黒炭と白炭乃十文字分ましうる寸

ごとく此足あるハふたさむ座りなるまり

たさ掛るて炭此たるね所よ丸すし

伽羅ハ炭乃上に丸なり

炭去りしも嫌となり

炉ハ勝炭し始なり
炭乃法りあい当るなり
炭ひすまね取り小
十一　小炭とて炭斗へひろい入火箸にて小取て
灰わり取て勝手へ入勝手たつ事なり
十二　炭斗勝手へさげる
十三　釜乃鐶取て取りたつハ又釜乃
鐶志め勝手よ里杓のとふ口よ茶巾斗を上
小座きし口の鐶をとれ一ちよ小釜の鐶座茶巾
小てし釜の蓋取え拭茶巾取左小拵かて口乃
下よあて手取拾拭釜の蓋して茶巾また釜
の座取なと次行に乃蓋も同様小すゝるなり
十四　釜座こそつく様なて張てつず
十五　釜取紙先元拵れたるゝこれたるハ懐へ入
十六　次く座勝手へ入羽斗拾勝手へもどき入
十七　釜たきくハ蓋も座取くハ舎席北間
まて氣を付湯小ゆる時元座る拘なり
拭勝手次第小付へきこと同なり

一 青葉にもよる又あまた針乃西なくあるハいたし
にも悪あり

一 枝数座乃床の花入乃針ハ杉針或地敷居
より上へ三尺六寸に打

花乃事

一 花入に長き枝を横一文字になし出るハあしし
境角なとへハ入るなり

一 花にもよ皇おほよ入しまくなく入とえ 梅ハおかし
入るなり

一 柳草花ハ前ひくにも多り入るものなり

二重筒の花の入用

此座ハ上よりの枝長りおハ下ニハ絵のことく花筒よりすこしてし
枝葉なといるへし

長き枝ハ右へ如くさ左へ如く枝頭より頭

此座ハまた下より長りおハ上へ絵のことくかし枝葉など見え
筒より和くいるへきなり

二重筒ハ上にハ末下ハ草花志かるへし

一 植花瓶乃花ハ花ニつなけひらきさしまかる

[illegible]亭主心次第なり 古ハ二ツハ茶杓立候
当代ハ二ツ茶入へかくう寸茶一ふくつゝ二ふくつゝたつる也
一 唐物建立の時ハまた[illegible]二ツハ茶杓まへ[illegible]建を
まへのよくべし

蓋置之なかし座りのす

一 竹節の同紋あり足あり同紋足一ツ台あり
なすびのなり
一 柄大ハ同じ紋じ足じ前へなかるのなり

水翻乃事

柄杓ハ時ハひさしまか寸一杓大と風炉ハ時ハ
ひさしより名かけ寸抱なり

柄杓之事

あられあちらハちそりあなり 柄杓指座り
盃やうえやういろくある

茶釜乃事

湯水すくきの時ハ前へぬく
薄茶ハ後へぬく
二ハ茶ハ上へぬく

一説ニ湯あらしさくへぬくぬきやうちやらんの云
まゝかこらんあり茶ハすぐにぬんめうとぬく
あり又ねの為すくさあへぬくすくとき

茶釜すくきハ三ツを大小よまぢへ
てまへのよし

茶入乃袋さたまらさる次第

唐物ハそさうにさたまく物なり

唐物以絲乃仕廻り

常乃むきひをひねりかへしきたる物も

あらうしきに奥ハ袋さたまらさる真にすへし

茶入袋棚ニ置次第

そこ残前へなし棚ニ置

袋別ニ飾るへし

茶入より袋ぬき出し折とめたる一つゝに掛りしおく

置て折とめ残先へよる残前へなして飾へく

かざり置て飾なり悪し　緒を入る時もそこ残

むかふへなし　洗りを前へなし紐指乃上より

元入る物なり　但ねりてさいハ袋上より

めんくに入る物なり　又蓋ニ置て〻

かうすし

茶入を袋へ入る事

うち残元蓋并入　扱ていひ残する茶入以而残

前へなす物なり

茶入乃袋ぬがする事

小壷ハ袋よりぬく但左の手に持あけて緒ヲ
とき分ぬがせしする大茶入ハ緒をとき人の肩
ぬぐごとく袋ぬがするなり

小壷に茶のこしやうの事

ひ称りと云事ハ茶すくいおす時口に口にこきまへ
ぬきおし掬茶入ノ口ひけて茶杓に先たゝりて寄
に付そこの茶くむ時ハ茶入かたむけさくまで寄せ
茶くむときに二すくいしてうし

亭主茶こくまいらせさうといふ事
客より茶いますこしそへて入よといふ事
右二言ハ嫌事なり

茶のいき之事

茶のみて後よいきかくする悪し上座一客人斗ハ
たゞしうすし末座乃人一切かくまじきす茶
のみていきハ無なり末座ハ茶碗見て斗なり

名物の茶碗の事

名物あるハ常乃ごとく見るまじし　武勝乃

凡座ニハ茶立跡て茶釜すゝきしてうく時所屋
すりありし此時ハ上座ゟ皇出茶入之礼請取返事ハ
出されしあるへきと申亭主ゟ見に取あり此時ハ先
ちやらんあかしかめ
一二ニ茶杓ふきし棚へ上る
三ニ茶釜ひ棚へあけ出
四ニ釜へ水指釜乃蓋すり釜の上ニ置茶巾一ツを
ぬし置あり
五ニ水指の蓋仕て拭茶巾水指の上へ置なり
六ニ茶入へきんしてあけす
七ニ水翻入ル
八ニ柄杓引切入ルなり
九ニ水指入ル
十ニ茶入袋取入ル
拭亭主あつて茶碗あきらて乃入ル此時立炭乃
うくべ拾ありし又茶碗茶入一ツ々入ル事此
時ハあるまれ炭残あつ洗け拭し六とかのあり

立炭之事

客に炭所望せハ釜あげぬさきに炭入斗持出
所望の也客炭置て帰りたるハ客より亭主
主に釜あげよと申ニ付亭主釜あげ以前の
所にて置環ぬきて置そこ元灰ならし取出

一 客亭主の座にきたり鐶とりつき先釜残る
所に炭を見る所に炉中を見んそのゝ灰流し
へ置ハそこ元置しらす兼合に火残せて置て
ましてあるりあるへき道かて主客火計を継なる

一 そこ元時分かんじに灰を入置くし長炭上に
置いつもの所に置投長火箸残火とも二所へ置し

一 太火をさん手におろいあげ火箸残なんじ
かりし也置置くし元そこの灰一すくい元あげ
置くし此貝なんだの中に置急のさき置
小付置投火箸残元よさきうんに火を入置くし
火箸上との也縁に先入申し

一 灰ならし客灰を置くし投ならしいつもの所
に置炭斗より也此時んたき物炭よ置かせ也し灰
のかをさ也ましさしとのける投たき物を置帰るこ

よこさへよせ小炭とてかろく此中へ入炭置かけり
前と同おなり
来小炭おつする時ハ足打小紙炭組おす大炭
中炭まん中ろく配物してさこころハ
ふりし炭所座ハ炭入ゟ切ち小所座するうこし
掛座下之上手より中ら紙下ゟか置器ゟ此時ゟ此時置
ある座主手よりおしきてい者
一 立ハ炭の内よ打拂し又食の湯おして大流
地ハうつりのなり

座主手ありて炭置事

先炭斗小火箸環羽たうきへ持おり鉢此太乃
腕ろうの所小置掛手残さす羽ゟあげ釜のさ
左ゟあくり残さし掛羽を掛手よ置環より
上より前よ同すくより残掛手の座ハよ客置
掛掛手残あけそこゑよ灰ハろくし足をく
長火箸上小置おす炭斗置たゝ流小置掛灰おり
流く小灰すくい入おすたきも香箱え出し 掛手立も
又掛長火箸をそれ火一所へ置立ゟくしまて一すくい入

よと云時ハくさりん手拭にてよきあけたりん茶入にかろく
此時扇子二つひろけ茶入乃うへ拭一ちょと上ニ置候て
手拭付置一ちとよりん乃ゟ次の人ハくさりん上ニ蓋
置事能所をうへ蓋置て

一 盆乃見所ハくさりん手拭指たのゆびそゑへ
座り大ゆびにかいつ拭掛りん乃次ゝの人同前
見たそうて茶の所に盆拭置茶入ハ盆乃ふたさ
置て置盆よりも太に置なり

一 茶入盆ともに床へ上るすみ一ちょう時ハ安手に盆
と茶入と指床乃下りん盆ふのせて床へ上る置
所ハ床の内盆此置同勝手乃方より床の内乃
寄様居りて茶入のそこまて九寸か一尺ほとよせて置
座りよ置所なり但茶入乃そこの寄ハ中なり前
後ハ置二ツ目ちかいなり後二めせたく置りのなり
前此ちかい置と二めちかいふ置へるがよし

中次此事

一 中次ハそこへゆび色付指かけし蓋れ時ハそろく と
元蓋とみなりと上るなり蓋の上に茶杓置時ハ

先此角から壷ゟあり茶すくう時ハさきから
前へすくふすくうものなり又まはりたてさまより
座りもうくたくハ茶をこて一ちゃ下まて壷をた此手
まへ蓋をするすれてみるなり

うつめの事

一説ニかく時ハ此やうにうる事
一そこへゆびハ一ツかけ而し蓋をちゃきれて此処なり茶すく
う事中次と同し茶杓壷時ハ前先ん一つかふまつ
すぐに壷掛なりうつめハ丸壷のだいなり
中次ハ肩衝のだいなり

大海内海乃事

一大海内海これ時ハ茶杓をとれ茶碗上ニ壷右此手ニ
そこれ左乃手ニにの右蓋残れから茶杓をとり
茶入の肩ニ大ゆびの右そこへゆびハ四ツかけてから
茶をくうりのなり茶をこれ後に茶碗の上ニ茶
杓残壷蓋をして右の手ニ茶入壷ゟなり
又常此丸壷残掛座りもくある大海内海ハ右
の手まんそれ壷仕掛なり
右二通ハ茶杓蓋の上ニ壷ゟなり肩衝の座りまて

盞の上に鉢ね持くし上に盃

つゝつき

是ハ流ゟ残たへるす茶をくむ時つゝむなるへきり

ゑをしくむ又盃時元ゟ残し流ゟたへたる所り

ふおくなりすいぜん用しあいしらいなりゆびそ

こふ三ツなり

きつきゆびをそへうけす

小蓋ゆびそへ三ツ明よ三ツなり

茶入此盞皿ニ茶杓盃置り乃事

右の方

左の方

此盃置りハ茶杓ハ中ハなり

あとのけて盃なり

此茶杓ハ名高し此時ハ茶杓

こいへ乃のゆなりあとのけて盃

是ハ氣飲付たり所要なり流まで此門都よ

心得るへきなり

一 巣蓋皿此事

炭の方

かくのことくたゝみに封あるへし何付え
炭此方へ巣ちもあり

炭の方

是ハ茶杓ハ茶わん

炭の方

是ハ茶杓ハけしはあり

座敷此指図乃事

三帖大

窓

棚

上座

出床

にしり上り

合席の時
又座敷のて
此方ちすん居て客
亭主ハ向座して居る

▽下座
是ハ炭置て居ル
通口つまり戸附膳おくト

通口膳ハ附口より

▽二 ▽三 ▽四 ▽五

三帖大茶之湯の座

窓
棚
口
生床
三
二

ひろ三帖炉合席の時
客衆の居所居様

窓
床
口
上
三
二
窓
棚
茶立口

ひろ三帖東向の時の座付手前ハ
一帖大目ならす形し

窓
口
床
三
二
上
四
まん座んなる
客人ハ初段
三角の所上座
より竹のそむ
方も茶入
きうじ位
りんし
勝手
棚

ひろ三帖会席の時の座なり
客四人なり丸のごとく居る
此座客居ならす形し

客人ハ初段
かまへ居
いろいろよし

口
三
二
一
客人ハ初段
客ハ居る
にじり上りの座へ
まん座んなる
宝床
上
四
三
先ニ客居
茶入て上
一九へ移り
中柱
客ハ膳
初の座
棚
勝手

新ら四帖半茶の湯の図

四客め入炉と見る内に
又客め入付付ん
五客先甲り入地
五客め炉見る内に
想ね居る所
掛五客座あけし

床　窓　茶立口　又　四　一　三　棚　窓　上り口　二

三帖大台座敷ハ居替えしかへしてよろしうすし

窓　床　又　四　三　二　一　棚　窓　茶立口

客きゃくをかこむ しやうじはきてたてる

こゝろ四帖半敷ニ中をしらる

刀かけ
窓
棚
くゝり口
窓
床
中柱

一 ゆりこ板乃前の打座りハよこ木のうへ
をすわたわれ打板をしら此を中ゟ左乃
方へ寄せ打まるの方乃事あり

一 書院乃くまんしやう法りのかざれ打座りハ
うきれさきさい内へ寄せゐあり其中しらしろ
二ツ又三ツもよせてし打

一 茶入名
天目壺 絵図此事

七ツ臺の七ツの内
一文字梅之紋を
ぬり色をこし
あかね色の紋を
霞掛三所を
名おく

一

大肩衝

シウユウトア
小肩衝

地くさ肩に
丸三黒茶を
赤に
あそう

わし
肩衝

うし地黒に
地くさ白こまうき
白にちんやき
辛子

飾袋

来

鶴頭

手瓶

瓢箪

水滴

老茄

水滴

一葉

丸坪

驢蹄

ゑつしむ

飯銅

文琳

号雲
千鳥
丸壷

伏保作
茄子
御物く

大海
御物上成

標庵

あけ
あか

湯桶

柿

せいのせんきハ四寸
三寸そこし
口のさしわたし二寸と
せのたかさと同程ぐ
よとおりせべどの
香炉

ちやかうろ

蓋まで作付ん蓋ハあけあとのけ
すき採てふくいまもおもし
寸法かくのごとくなし
けむりうすくちえふる

ふたさまき
こきし
しんあり

十四、天井ハ柄杓をとれ又湯残らず天目へ入る杓
柄杓をひしやく立に立る此時に袱紗左の手にて
持也
十五、釜の蓋仕て
十六、茶釜ハ常のごとく茶釜付る
十七、茶巾ハたゝみしハ上下にありて茶巾さし
合しも杓ほどの所に置
十八、茶釜常のごとく二三度まはし此時習あり
たての茶筅のごとくしらくしてとかくさねあり
濃湯ハさづけさ少しそろりくかと付抱あり
十九、茶釜へ入へはつりをあて入へなして入初中後あり
之下なり
二十、天目左の手に持湯残を建水へ
をつる杓茶巾ハ常のごとくつくし天目座に置
茶巾つくさめて座子の上に置又かんする時ん茶
巾つくさめて置く
二十一、右の手にて茶入をとれ左に掛蓋ハ盆の左の乃
せついよりくせうけて置又せつい二寸のけて置

二十二、茶杓を取茶くむなり

二十三、茶杓我天目の上ニ置つきまん茶入れ口を
こしらへ蓋付て又たゝみねりよの所ニ置

二十四、茶杓ニ茶ふきさたしまんうたせ候天目
の内まんうつなり

二十五、茶杓の貝を盆のむかいへおとのけて
あかすたれまん置

二十六、つくさまん釜のふた我ニつくさ我ニてに
もたい柄杓たれまし元湯とこむ湯とかし
釜へ入柄杓釜ニ置置後置柄杓なり

二十七、茶釜ニ常に入って立る茶釜入へおつるへ
なし置昔ハ一かて立るし利休より置まい茶

二十八、ひさまつきし蓋をつくさまん元前に置一天目
のせあかす仕内ニ茶巾さんくりして釜の蓋の上ニ
置又天目蓋ニ置きりし立る水天目置て置そし茶

二十九、茶蓋天目まん茶のむす昔ハ蓋ともに
三口のこして蓋たてしてのむ利休より八蓋ともに
一口のこし蓋をとりとって又ハさうらう蓋たてしてのむ

次へ源も時ん臺よの廿源も次の人へちましとかされ
らしの廿もまし源も比時ん臺をとりて次へ源も臺
の見所り大くし盆の見所りありけらかへし見
ねねあり
三十、ちやらん入て上座へ天目臺とし小しとしト
のミてかく天目残臺よの廿もとし臺ちさよ盆
若狗の天目ありし臺よの廿て化士人に渡して廿
ましきし臺天目ありしへて亭主初し在らすよの
所は臺と天目残ありしへて盆亭主ハの廿て取
多り臺天目の取座りハたのひだ残化さし臺比ち
残安乎かて元二すさりして本の座へ行前よ盆
天目井元のむ物く
三十一、亭主天目残臺の上小盆前へ元一天目下
小盆又臺をたれ所小盆
三十二、多指の蓋残元多指比たの前比方臺子比
極との肩小りして也飯盆又風炉比方こさりんの多
の座へ小盆あり
三十三、釜比上あり柄杓ハ残元源をくて天目へ入

手指くゝむりてひさまづきいてこれのむ是ハなすり
わいのす出入の事なりたゞ諸手よ呈召ちがへん
元ぬしそれへあけいでさゝのむすハたりとむすま
三十四ゝうす茶入まいりたりて先ん茶入にこいたまさりて
又手に皆結させて蓋並すきの所へ手段其時茶
入にこいしてま
三十五ゝ先茶杓茶巾天目の上より茶釜入の上より小並
三十六ゝ茶入大衣手すん元前より並杓蓋段々おけ
ものはり杓茶入手すんにして茶入地前段我おきよ
なして大地方へ蓋段ハ掃りすり座より座りよ
しつき茶入の前を大地方へうち
三十七ゝ中次より先のうす茶おし手指のたかす小
並すハ茶釜組合すんなるし杓茶杓元にてすくよき
並
三十八ゝ柄杓段元湯すゝきしてやさき常地によくよ
して左茶釜にいうりのごとく手指のおよ並うを
茶ハ此方泡寿より左りなりこい茶えりまて仕廻へ
とゆり時んぎやうどうりをのゝ湯すゝれして常の
ごとく手すゝれ仕茶巾元ふをすて茶碗おし

やき天目にちをし入臺の上ニ天目の世天目の外
小壺中の茶巾袋入たまる茶釜袋納茶巾入茶
釜袋壺揃茶杓入やきさなのやうに入作りつむ
けて壺あり
三十九ニ中次と臺天目のそろへて並べ壺揃而袋結
四十ニ柄杓立へ柄杓立なし
四十一ニ釜の蓋付て
四十二ニ水指のやき付て
四十三ニ[illegible]茶入あげ壺

四十四ニ皮手まり臺天目ならの所にあげる
四十五ニ蓋置のつの所へ茶釜次第時茶入れこいまされ
たゞ一服きこい茶立て仕廻し時の事なり
四十六ニ茶釜入勝手へ入る
四十七ニ水建入水こぼしやを揃りよの所へ茶次
四十八ニ茶入出袋さかりて勝手へ入る　以上終也

臺子中飾此度

一　水指の前に茶入茶釜ならべ小壺飾なり
一　臺子と茶入よの乃写寸し茶釜狭さすまゝに写すの

一ゝ水建ニ柄杓の仕て指おくいりすの所望のよふ座

二ゝ柄杓残ゆへてゝ座の上ニ座なれ残風炉ハおへかこ

一文字ニ座なり

三ゝ請手まへ茶入茶碗ゆおろし風炉と手持の

方ニ座組置乃上なり

四ゝ茶入おへゆ袋ぬう仕こきんして手持の左の方

ニ座蓋子と茶入の方四寸ニ座なり

五ゝ茶杓ふきて茶入のふたま貝残鋤な

六ゝ茶釜と茶入の右ニ座

七ゝ三角ハ所ぬくい茶巾残座

八ゝ柄杓とゆ釜乃ふた置

右おうりまへ風炉ハ手おく風炉の仕廻ニ替なり

別し

炉ニ蓋子座合之事

一 茶入天目ハ中立して手前ニ可なり

一 蓋天目ハ蓋子の真中ニおかのよふけて座

一 炭ハ第事炉ニ替すり別し 仕廻してかはすり別し

初ハ羽箒 床ニ置也

水指

水建

釜

茶立之次第

一ミ 蓋置取出し袱紗右の手へ取出し置 但袱紗右乃
そとに置

二ミ 請取て盆をとり茶入をおろし 袱紗と茶杓乃
盆の右の方の中へ盆乃角と一所になをり置

三ミ 茶巾を天目におろし 又釜の蓋を取置

四ミ 水建残のうへ釜の蓋取へ取出し置

五ミ 茶巾天目に入建乃前に置

六ミ 右の手にて茶入れ袋ぬかせ袋のそこを残置

して釜子の天井は羽さき乃下ふちの位に有
七ヽたなは一とく蓋おき中より前と同し
八ヽ茶入ヽよりたなは手前蓋の中に有
九ヽふくさ拵様にてさむ
十ヽ釜子より天目前に有 ふくさ元におし 茶杓
おきたなは一とく蓋に在
十一ヽ手桶はおもとぬくべし
十二ヽ茶釜三角の前に有
十三ヽ茶巾手拭乃おもに有
十四ヽ柄杓ハ元の手にぬく杓指よりさし元の手に
ひしやくおろし釜乃うつし我元
十五ヽ両我かこ一度とすれ二度両かこれ元ヽ柄杓
我指釜の蓋すり我ひしやく我蓋置の上に置
行は時乃一とくあり
十六ヽ茶釜は常は一とく我茶釜そへ有天目よ
置扱ふ手よれ天目我元手速は位に置我ちそせ
元もとの所へ置ゆるが吉
十七ヽ釜をうつ

十八ニ天目臺よの也多候すれハさき茶立ろす右ニ
用し侍る柄杓の作法あれ時宜によるの事なり
但侍るてよう天目臺とも小羽子乃上の蓋置ハ
置てよ云へ多練を抱し侍るの時の事なり
十九ニ柄杓乃小指茶の蓋してひさし残茶て右手
まゝひしやく残立事此時多りよ皇茶入こいれる筈
事おなし同し
二十ニ右く置多こぼし此所置
二十一ニ多こぼし勝手へ入る
二十二ニ多建指おい天目臺とも小羽子へたゝみし蓋置
りもの下へ多残に
二十三ニ多こぼしもとの所に置
二十四ニ天目勝手へ入る
二十五ニ茶入勝手へ入る
二十六ニ立炭候て第事終て茶湯のことく吉ゟなし

風炉の事

一 風炉の小板長さ一尺四寸 四寸二分 幅八寸五分 但し
中柱乃あき 座敷よりハ小板ハさきさき分寸勝十一同よ也

あり大板ハさしわたし七寸又ハ七寸五分まて五腸九あり（八寸より十三寸まて）

一 中栓ハ銀炉にハ釜乃環付と中栓ハあきの中
ニ環付のあたり迄ニ小板大板とてよせすゆるあり
但小板大板とて二寸五分前へ川かし すゆるあり但
七寸も七寸五分もあけへし

一 風炉ハ八掛りと云ハ小板の上ニ風炉据ゑてよせ
て板をかたよせ風炉八掛り据ゑかたへり小
いろとりのなり

一 風炉ハ寄ニよせて小板の上ニ置て置前へも
後へも二分三分ハ川かし水入の事ニて是ハ風
炉ニ寄あり

一 一方釜ハあれて方をとり分さかりやうに小すゆれ物て
始より二寸心得ニ小ごとくすゆるなり

一 前より小脇の小板ニ風炉据風炉ハ前後
小分をえ小板乃真中ニ風炉を置代時風炉
まわり二分三分ハ寄のけよ 板釜をかけて
釜の環付と小板ハ真中ニ置に小すゆる

一 風炉ハごとくすへ後前へ足二つ 後へ足一つ

一 風炉にハ御飾なり香箸香合鐶置なと来られて
風炉へ焼え入る也同ハ前よりも七八寸さげて勝手
の尾ハ乃見さにも置なり其の同二めのけて置

炉へ釜鋪の事

一 勝口の釜乃敷ハ炉の縁より五六分釜高くを
ゆるなり

一 焼口上より乃釜の敷ハ炉乃縁より五六分ひきく
すゆるなり 但釜ニ掛枝ハ鎖にて本さゝき其より
五分もひくゝ置をゆるなり

一 石壇ハ弐尺壱寸二寸のかしこしうき石壇ハすこしひろく
をゆるものなり

一 ならひろさのさの折屋の床のまへうさい我むけて
折のものなり 第五或ハ〆て同事し

違ひ棚の寸法乃事

一 ひろさ八寸六分四方二ツの棚の高さ六寸なり板の厚さ
さ四分また三寸也 棚ハ横竹より下し 棚の高さ三寸九分し
よこ竹の下てより板の下てまてなり 違ひ木ハ
をいまなり 違ひ目四分四方なり

むかいの座ハとこ中ゟ勝手の方ま折なり

一 下地まどハいかましくしんまかくかなりされ共ふ
くかくせうかんのハそこさうまうくかなり

一 茶巾ゟひろさ六寸六寸又七寸布わそさ程ひろく
するなり 当季ハう絹ん五寸ますうなり

一 ふくさのひろさたてよこ二十一月ふするなり 当季ハ十
八月ま十九月ふするなり

一 三羽箒ゟ羽えらさいハ柄の方七月羽先ハ十一月十二月又
十月九月あて仕

一 灰いれまくま台子前ふハすくなくうけも志かうのあるへ
すくなく立炭まハ志かうなかへたく其ハいれまくとし
但灰ふ酒いれひくいもの本流也 灰ハ芦炭をなかふよさ也
紹鴎の茂けへ手香炉なとの灰いま塩いれ志ありにまかせよし

一 手なへの釜の鉉ハなかしひしやくえらむ中立の
おまま湯いれ手なへ次ふある 引茶なかいれへ云何程なれ
もちな茶の前かうたなかいれまへよしこ志ハ
胡茶まあいきる人あれハ此方台子前おまま立柄える
茶の前なへをこふなかるかんれ立う寸茶六寸すゝ此たなあま

手水鉢つくハかりのしき水鉢よりつくし胴ハよくよしあ
しておもしろし但客の前ハゆさき鉢かけいくへきものゝけ
亭主ハ水をとらつ客の目の前ハ亭主ハかりそやめて
しかもねゆへゆさき鉢めくけしして水鉢よりめく客をハ
亭主なり

一 炉中ニハ炭鉢もつかりとあさく地炉中にて灰鉢を
入ごとくの法の鉢こしらへおすなり其ハ炭をてごさ候
かりとしてごとく此法の鉢あつくおし灰すくなく又
やくすらぬし胴を亭主ふかりなる物し

一 茶入の袋ハ小組かハ大きなる袋ハふとき打ちをひとつふ
りきかり組ハ右此手あるく組のちいさき袋ハほそきとむ
いへなしかりちあ鉢組か

一 茶を常にあ合せひとしとてこいハ茶ともかれ伝ぬ勝手へ
入時殊あるく合せ時茶鉢下されりんと云時たとへ茶此
御あり

一 茶入鉢の中ほかへ置かりかんたおもむりよくへさすゐ時ま
勝手より出る亭主鉢乙おし上鉢ゆさき水建此ちれ然に
亭上ハ茶杓鉢の世話限りそて立をさし茶入ハまとの

而不届なる事

一 茶杓にて附仕込ミハ身の真中まてふくさにおさす
又建の手へ届りにくきまゝそれ不絶又建のそこまて
ふくすハわろし

一 茶入にてハかゝしさとのまゝつきハふてハきらひとかとのなきよし
きつきハ届かぬもなるやうによし

一 めんばのそばめ蓋ハおもにふへおす蓋にもおそく蓋かく
取りかへ蓋おい用

一 茶杓茶碗よおく時ハ茶碗ハ茶杓にすへてつまむ事
大きなる茶碗ハふし残指あまりにのひろつきハおもに緩く
よせおきおと不足なるくふし残指

茶書

麦数奇といふ

夫数寄といふハ茶の湯乃事也然ニ何とて茶
乃事にいへ数奇と書なり此名ハもと山居乃
禅僧のよせつくりの庵してここに茶を数寄事より起り
人みなく学ひ一流の道となりていつれの事にも
好る事なりて多くしきことはなし古き
たゝいふ形に楽しみを極まりかゝるゆへ
其人乃分限にかゝはらす貴賤をいはす道城
昔より人を数寄屋囲もけつらうを嫌ひ

一 数寄の字乃例をうちくづしてよミ申候

一 侘者ハ太さく土竹乃ゆかれ用ひ申候

一 今下地窓と申しも元を尋れハ土壁乃
ぬり残してをかれ然るを始まりて窓とす
ゆへ今とてもよしまでおほひのやうに申候

一 数寄屋腰張ハ湊紙と云紙にてはり候事勝手の
方茶立口乃まハりなと反古にて張申候

一 通ひ口火燈口とも申此口ハ此ころ名護屋山三乃

小屋の四畳半の座敷も利休 御成いたし秀吉公は
於数寄屋にてうしさまけ茶未好みいたし給ひき
左近殿へ出来れは
一 床きりけ宗大和大納言殿に成候ゆへ俺て出来
ろうさ作宗より松ん宗より云物好あり
○一 尺八竹の寸法 七寸弐分のものなり
一 数寄屋をとは六畳敷よ一間の書一間の床
はきやは庭数を紹鴎四畳半をいたし去家にて

りのをつけ小方丈と名付今小紫野大徳寺高林庵に
有しか床は大平より花のたな無花を入まじけれ
○紹鴎花入寸法のより
一 床の本の板目あり長サ五尺六寸横八寸三分八厘
厚サ弐分半板の上下木口裏表共ニ面一厘
一 とうろうより折釘座金物まで 二尺弐寸弐分下より
折釘の座金物まで二尺三寸三分座金物指渡し
三分八厘九分の上り落し 折釘座金物指渡し四分

三間之

二間之

一数寄屋ハあつさもうすさもあし

二間之

平三間

四畳大目

ヌリこかし

柱

ヌリこかし

ノ床

一畳半

袋床

床

一畳大目

床

天井と
土ニてぬり
まハしたるを
洞床といふ

長四畳

志

柱 通し

内くり

床

一囲にも其座同前の仕舞にて卜

一刀懸棚ありしハ扇棚と申候よし

口扇ハ刀掛の床飾へさして置す

一膝懸之後初手前候事

一ちり穴ハひさし下に一ツ雪隠ニ一ツのみ有之候

一数寄屋囲くゝりしき事ハ大工乃書と申候二冊

一釣棚二重三重小にも昔より用しやうよし二重

釣候を利休二重ニ改め織部より三重ニ造り候よし

細川三斎ハ上二重板同寸法竹まて釣下一重桐の

板中竹の下へ見申板よ由釣候而下重ハ寸法違候

此外候等通常の寸尺ハ定まりし候

一懸物表具茶の湯の床飾ニ候ハつりしき

掛まて候

一表具ハうちも表具ハ忠情ハ忠備ハ忠式之

四幅対又ハ双幅八幅対枕ニ真行草なし候人佛

厳表具ハ臺表具一色にて然へし 仕様ハ一ノ人
表具ニハ地あいにても後にても取合よき方を用へ
紙表具ハ極真たるへし てハわろし
一 軸まきまてにて置ける所をはさみ軸さしよ
いかにもそはだてゝ軸よく軸かけして事なら
ましき物にては又紙表具しても竹軸なとも用ひ
申事にては表具の書表具ハ紙継ニ有之由
一 絵なと并墨跡ホの紙表具ニ事ハ大工の書にも有之候
茶人書ニ有之候事
一 雪隠の中にけしきよき事 夜安いかし 清め候由
別わろし
一 炭花の数向右切の事 炭を掛さき先之ニ花
次ニ花ハ久を先之ニ実をも活ニ起様の人数多
一 風炉炉裏ニてハ釜をかけ候けと云風炉ニてハかけ
おろしと云ヶ様なる云をも不書可知也のよし
一 利休又人の伝授の弟子流とも申候ものを蒲生飛騨守

細川越中守殿牧村兵部殿池田掃部殿古田織部殿へ相伝候
一茶の湯の伝授といふ事ハ利休より之事のよし
古人の申候ハ不案内なる人の申事にて候
利休より極秘の事ハ茶の湯の伝授の次第ハ第一冊紙の
うら書ハ伝来の十法之人紙のうらにしるす第二
花筒切紙第三行茶杓切紙第四墨跡第五
切紙押紙第六又侘茶のしたて事右之外の茶道の
秘極にて名目さへ志もなき事茶道三百ヶ条まで付授

然しとかく到りて申人もまれに候尤右の条目稀にて
思ひて書付候
○此外にも密にふかくいし御書付御座候一休和尚へ
珠光参学の出付と心得の書とも候又玉舟
和尚片桐石見守へ宗乃書付ニよ
見性知　見性情　外道智　禮楽
數寄　數奇　清心　なるし和尚御伝授の切紙
右之是を茶道の極意可と当流にてさへ是ハ

今ま有之法傳授ニ而候ハ右より記ハ五ヶ條の事より

一極秘五ヶ條利休より傳授の系圖

珠光　南都称名寺

引拙

古市播磨

紹鷗

志野

宗珠

宗二

宗及

宗久

宗易　抛筌斎　不審庵利休居士

宗本

江月和尚

信長公

秀吉公

蒲生飛驒守氏郷

細川越中守忠興

瀬田掃部

牧村兵部大輔

古田織部

千道安

秀忠公

大久保相模守忠隣

大野修理亮

雲龍院済心涼

大久保彦十郎

小川左馬助

金森出雲守可重 宗和

桑山左近大夫

桑山下総守 可齋

寺堂将監

天方修理亮

桑山内匠

片桐石見守

慈恩院宮堯然法親王

保科肥後守正之

稲葉丹後守正通

清水道閑

薮林宗源

清水道竿

薮林助之丞

怡渓和尚

木下右衛門大夫

朽木和泉守

堀田中将綱村

桑山志摩守

足達雲斎

大久保四郎左衛門

今峯舎人

一 茶壺之名なとの事

一 葉茶壺

真壺　遠山また必ず二つ[illegible]

金花　蒙野

肩脘（スキ）　杉花

花青香 肩に拓やる　蓮華王

青香真壺　流（ル）宋（スン）

冬（フユ）間（カン）　青香

黄青香　漆壺 唐より漆入て渡る壺也

一 和物とては

藤四郎　祖母懐 [illegible]

膳（アヒタ）焼　信楽

丹波焼　煎餅

古備前

右通古来より壺は用ひ来りとかや

一 葉茶壺翌年御口切より紅代茶宜之式残茶試

用ハ片桐宗源物語しは組とし候糸さ之色
打つを繕り分の糸二色ニテハ曲ゟ首 名紐同細こ
ハへ共利休太きよ好ある人の才子ニ而も太きよ好成す
○乳緒風帯ト壷の乳より付る緒と乳緒トハ
口覆して結ひ下ケハ緒と風帯トハ
○乳緒風帯長サ左ケ壷ニよりて之へし絹糸也
九合ニ壷ニ可合事
○乳緒計無ニても傍ニ風帯計無ニてもよし

右ハ乳緒風帯切し飾るなとニテは宗源
トハ壷の口覆をして結ひる緒ハ九緒と
云を同人也
○袋織物裏付ケハ二ツ折二竜をもしふりとり
壷乃口ニ切して封を付る仕様有の切の袋
乃緒ハ常の緒之其外長緒寸ハ左ケに対して
色も壷ヨより緒色袋切の色ヨ可色合也
○口覆利休好有リ古ハ覆より四方の角丸キ也

一茶園の事

○壺の蓋志ゝ巫てある好ゞ要也

森　川下

朝日　祝

奥山　宇文字

右六園ニて後ゟ抹かゝし

一葉一袋ハ廿人ゟ袋ハ十人ゟ半袋ハ五人の積りと

一茶碗

山城ニては　祇陀院

丹波ニては　伯夷

みち星鐘ちゝしかし

一釜　上作　芦屋　天明ともかし

野溝釜御物　大桐釜

小桐釜　妙の霰御物

一万代釜釣物　信濃釜

大霰釜川摂　ゝ津前釜水四斗八合

梶釜　宗安好物
切亂釜　タイカウトウ釜
菊水釜　古橋釜
ロナシ釜　宗仁釜
猿釜 浄也　征鼓耳釜
粟釜　浄張釜 紹鴎
平釜 引拙 祖母口ナリ　二重釜
瓢簞釜　道珍子元釜

宗易好物　忠内釜
瓜釜　チヤウケン釜
姥口釜　紹鴎霰釜
壺釜　鳥釜
丸釜　押カキ釜
川龜釜　破落釜
吉井釜　富士形釜
尻張釜　鶴首釜

鉄釜　　須弥釜
吉野釜　　釣績釜
雲龍釜　　筋釜 紹鷗
姥口釜　　亀釜
アコダ釜　　浮亀釜
万葉釜 宗易　　高羅釜
鰐口釜　　大丸釜
古瓦釜　　霰釜

平六釜　　茶ウス釜
霧釜　　責紐釜 水五升三合
柳釜　　破子板釜 宗及
箪瓢釜　　道和釜
濡釜 珠光所持　　コシキ（甑）釜
三味線耳釜　　琉磨（タツ）釜
園在釜　　野カツキ釜
四方釜 宗易　　几帳釜

笠釜 紹鴎　　古肩衝釜
長釜　　松破釜
車軸釜　　コクテイ釜
糸釜　　阿弥陀堂釜
カウ口釜　　林徹釜 宗久
洪放釜　　筒釜
蒲団釜　　九丸縁釜
礎いしずへ釜　　八角釜

鬼面釜　　平蜘釜 松永代ニ失
荒浪釜　　唐銅釜
伊勢釜　　善好釜 宗甫
小畠釜　　浪釜
蜻蛉釜　　鷺釜 宗及
右之分利休時代名物の分見逢出付
やトロ未外もしうを御座候
○環付

付之ハ風炉釜の据まへてあしくハよし

○釜の内に湯へを洗ふる事数寄者の嫌ふ事也

一墨跡

和漢共ニ臨済派のを用ひ来りハ利休ハ大徳寺

派のを用ひらハ元ハ派を專と致ハ利休墨跡

掛始ニ有悟の墨跡掛ハ也

一墨跡横物大文字ならハ二字掛細字ならハ名別文

一行物ハ五字七字のを用ひハ夜会ニハ細字ハ不用

一墨跡第一筆者乃道徳第二語句第三ハ能筆第四書

極第八紙のしろ乃物之候畢竟自己見性工夫

一右の墨跡ハ外ハ別段無之ハ二而道徳語句ハ当極の物也

一客墨跡を掛てへ経とよミ申ハ又ハ字ふんなと試

見ハ候者つまりハ笑止なるものなりし我無物にて

不知を不足に見へハよし

一墨跡を用ハ圜悟禅師ハ宋ノ唐僧乃なり

勅圜悟　隆庵立　杲大恵

元比庵　華庭居　黙或居
先佛照　令無中　傑峯居
登百拙　堪笑翁　顛癡仙
善妙峰　簡北磵　陵淅翁
亡鉄牛　岩少林　岳松源
生破庵　生曹源　濟大川
聞偃溪　明介石　珍苑叟
顛東叟　勧物初　淨無庵

濼無文　瑞荊叟　開無文
祝滅翁　嵩運菴　閑掩室
通無礙　性無明　範無準
董石田　冲癡絶　凞晦機
端原叟　已僕岩　蘂南磵
高雲峰　濫止泓　智愚溪
徹清溪　悟枯崖　有空嵓
珙横川　巽華石林　愚虚堂

行石帆　隆棠溪　月石溪
慶虚舟　欽雪嵓　倫新橋
恵西嵓　智別山　一環溪
曇希叟　敬简翁　怪淺堂
忠石梁　元無學　寧兀庵
恵愚極　彌頌極　潭清凉
沂笑隠　倫仲芳　渓石室
輝東陽　林竹泉　噩夢堂

琦璞石　寧一山　會東里
曇面硐　曇覚原　俊用章
瀞季潭　新仲銘　渭清遠
眼物先　畊石田　衎獨菴
曇天倫　法性海　湧東海
愚傑峯　砥了庵　猷仲謀
仙竺仙　愠恕仲　叔悦堂
照大千　敏仲謙　寛雲海

下月江　悦甫楚　明獨孤
了郎体　習定門　俊明極
忠雲芳　戒幼居　本中峰
義斷崖　誠級學　林平山
覩無人　如一居　及愚居
聞仲猷　仁竹仲　紹古鼎
素竜嵓　逸日休　霖竺田
信之涓　道竺元　淺古林
愚斷江　下高隠　永東列
訥東理　林獨木　曇竺雲
念大休　雲閑極　芝雲石
伏虎嵓　珍玉山　妙高峯
定鉄牛　陵虚谷　信及居
瓊洪山　隠霊山　愚如居
碇方山　崖古田　日東嵓
逸樵隠　心竺田　澄請拙

魚仮堂　砥平石　香東陵
蕃石梁　文華国　復見心
長千嵓　交古梅　浄長翁
畢甫翁　油雲外　日東明
璵東陵　成雪軒　己復嵓
右之外何茂くまで近代略し古ハ上中下の
絵と墨跡由てゟ　勅筆并定家の宗祇の
筆トもも用ま事ハ

○墨跡表紙切様の事

一 天金物乃三ツよ元ちく二ツとなく寸も二分よ
まる事也天長サ風帯一二三分おしよりて表紙
表紙竹のきハよて寄る右の紙長サ三ツよおり下ノ紙
その上おり返し中ハおり上へまるる表紙紙部あわせ
ところ々よおし口伝多し

○無物名下し事

表装法仕様遠なく
ことすまり

掛緒

一表わり絲の時熱廻りを廻として中と廻よりハ細書き

一風帯六分より壱寸弐分まてと

一地乃ふとさ六分より壱寸三分まて

一まんわり惣の幅ハ壱分半弐分まて

一文字廻を付ハ壱分又ハ弐分すこし無用の事也

一小廻りのすそ分ハ弐分すこしやうにあるへし

一寿わり惣の時中廻り無紛二分より八分まて

一熱廻り無紛一寸五分より三分まての内の廣狭也

一茶入 古 本 竹

一小茄わにて ろう數ハ

茄子 天子にたとへは

文琳 将軍ニたとへは

尻膨 良

圓壺

大壺とやらは

肩衝　　大海

一 こちらは昔はもて色てもさしは唐物へいふなりたゞ数寄
和物へは金襴なし 是はこれをさしたる 但し唐の字をみては

一 道幸よかきつき柳と云を唐物のかきつき柳といふ
唐物のうちに漆多く此柳を借りて大海と唐物
かまとは唐物のよと云

文琳　　常陸帯　　鶴首

驢蹄　　大名　　胴高

瓶子　　柿　　水滴

湯桶　　瓢箪　　爪

橘　　柑子

此外宗易形は

柿　　鮟鱇　　餓鬼腹

餌畚　　胱广　　太鼓

十王頭　　半切　　車軸

飯桶　　沖道　　角木

口廣　　類座 擂茶とも云　　瓶子

経付　　内海　　耳附

笹耳　　老茄　　不聞

鳴座　　手甕

右の外まて此外にもいろいろあれども不益なれば

書付申さず

一茄子文琳大海数座経壺手瓶の茶入あらひ

きよし

一茶入蓋ハいも脹てあり小壺四ツの蓋肩衝の蓋有

裏ミうきはりせぬ事也また瓶割蓋と氷滴乃

茶入ハ仕口のことく口にも見えまた袋へハ耳付にも

こしよ入る錯時も先同前ては仕口にくし

茶筅の方へ口をすゆるなり

一底ふくらハ茄子のうけ台流布ハ文林のうけ来ハ

小壷のうけ中次ハ肩衝のうけと云由

一飛口乃茶入ハ袋へハ向ふのまわりの方へ口をよせ候

別して水てき同前の由

一作り名そろへのこと

口兀　古瀬戸　辰ノ市

飛鳥川　元祖藤四郎　文山藤四郎

花藤四郎　京目藤四郎　虫喰藤四郎

姉手　黄薬　真中古

後窯薬　朝日春慶　雲下春慶

堺春慶　合手春慶　初合(ハツミ)春慶

伊勢春慶　瀬戸春慶　橋姫手

玉川手　玉柏手　天目手

落穂手　万右衛門焼　池堂坊手

坊主手　柳手　野田手

山居手
杢々手
木目手

後赤
芋子
釣徳芋子

芋頭
鳴海手
小川手

利休焼
源十郎
織部焼

時雨手
協わ手
薩摩焼

桂手
生海鼠
金花山

頭長手
油虫手
青河手

瓦手
吉象焼
淡紙手

肉黄茶
蛹螺手
廣沢手

挽貫手
正意手
新吉象焼

挙底
爬取手
早乙女

胴縁
胴卜
下髪

赤熊
追霞（アラリ）
西紙

鶏手
鷹手
市場

飛茶
大覚寺
杜若

吉羽
筋類（ナタレ）
守治橋

乃至椎名年といふ茶入て御座候茶入と
今唐物と申候
○棗　大中小　中次　大中小
長棗　丸棗
面取　さつま
茶筅形　吹雪
頭切　金林寺　松木目
是は蒔絵或は黒朱塗にて候皆薄茶入也

○中次の元作法に有之候盛阿弥秀次か前ゟ
と云を用ひ候は此年外堺大塗師堺久唐紹鴎
利休時代京良塗師織部ぬ唐森三与三とて
名もあるし候
○棗は蒔絵の名を用候蒔絵の頂物
寶武　上代物　後ち羽説あり
利休時代　東山時代　信長時代
太閤時代　鎌倉彫　越前彫

金林寺　小田原彫　五十嵐

根来物　長府　若狭塗

新蒔絵或塗師彫りし沈牙なとは

○中継袋紙切様之事

袋紙ハ上ノ底かの蓋渡しの寸を九二つニ折外ニ而ト又一折

の三つニ折て一ツとかハ四方ニ

切ル紙藤くハ二枚厚くハ一枚

古来ヨリのり入を用ユルニ

口伝多し

客付

前

一中次ニ袋なきものニハ又有之とも結ニ〆ものなき物ハ

全囲へ不当あそてハ中次の荘厳ニハ茶の代りニ袋紙をしは

一薄茶ハ其まゝ濃茶ハ字ニ立なりのなし

一切ル表ニ茶入天目の袋ホ様ニ〆し候由

時代物　東山殿時代より古し

大蔓　小はな　二重蔓

古金襴　雲菱　金紗　紗金

銀紗　下金　こう羅下金　金地

布通りてハ
茶入天目棗木の袋の裏にはひきを出之人用ゆハ
ほうきに綿糸にて付ル
一花入　金　土　竹
竹の子　つるこ　花瓶　かつら
寿磋筒　磋　桃尾　経筒　そろり　釣舟
花入竹の花筒ハ傳授事なく　傳授
なる人ハ切事すべからず

一重切　並筒　尺八　二重切
投切　切捨と云　鶴首　色て一節とし二節にて切なり
〇家にて舟を竹にて切始め寄りて無けれども或の
割りて切て一段と満するおよハ内
〇外に籠花入も用ゆハ籠には腐枝ふ用ゆのまてハ
〇舟をむりしまて床の天井の中に環を付無ハ織
アかとしかけの内に環を付無初めハ書院
違棚の下にひる環を付ても無きに板床なる

なりとも五分よりも一寸計も下に成ども床より落枝
て垂れ若枝より水中の受筒より落枝よ水ぎわも
干うやう可然のよし
○惣して青磁の花入花瓶銅地のものも花入は
水こぼさぬ様のよし
古銅は
青磁にては
砧　鯉ノ耳　鯉裏耳　浮牡丹
沈節　牡丹耳　天龍寺　竹ノ節
裏白　菊青磁　七官　七官浅葱
延寶四　延寶五　白磁
唐銅にては
清銅　紫銅　金紫銅　宣徳
胡銅　銅丹　黄金　唐金　高麗砂張
南蛮鉄　南蛮砂張　南蛮古渡　市子金
閻浮檀金

中山宰意庵亭へ出入なく用也

一炭　一庫　池田事　横山　白炭也

小野　鞍馬

一灰土器　大小

○小土器よりも小なるは多く大なるはすくなく

一灰杓子　玄兮

○古来より数寄者の好みあり

一底取　炉風炉

○盆は何よりも取合によるなり

一茶巾　越中　川上　照布

○茶巾の積り事

一布たてに二川は折四角にまるめのめ二つ入しよりよし

むね八代へ金也平縫しくはちぢみはに縫ゆはすこし縫

一茶筅

○茶筅古来よりの作者

蓮華　高山　玉輪

○茶筅寸法之事

一 竹のたけ八分九分の内有り

一 軸の長さ九分

一 節より上二寸八分す

一 湯とをし壱寸五分す

一 穂のかず数法なし

一 あらき細めもよし

一 穂二重削法おほまねやうにきたんなり

一 穂の削様皮目の外は薄々やうに穂先を
柱ねやうに穂先之成様和らかに穂さき平めに削る

一 穂数百本程内外の穂とあるもあり
今時の茶筅は古法よりも依少々気の相違ありといへとも大体茶筅の古法なし通ずるなり

一 茶碗
白高麗　黒高麗　井戸
根海　古三嶋　花三嶋

青磁碗　白磁碗　珠光茶碗
右外染付しかハ香合の下より出ル

和物　萩焼
瀬戸焼 白薬をかけたる　織部焼
肥後焼　唐津焼　中津焼
薩摩焼　伊賀焼　伊勢焼
土佐焼　瀬田焼　信楽焼
久田焼　了段焼　楽焼 長次郎比丘尼を為最上

一 粟田口焼　御室焼　清水焼
一 黒谷焼　押小路焼　宇治焼 朝日とも云
難波竈　高原焼　利休焼
織部焼　玄清焼　光悦竈
右唐ゝゝ　平皿ゝゝ

一 茶碗乃形
塩筒　朝顔　平手盤
椙形　筒　中膨良

端反

此外　形部　畫筆　墨跡以

一水指　金　古　本

○釜桶（ノヨケ）釣瓶　手桶　三色ハわしらいあまず

○釣瓶ニ円檜裏風炉そへて釜へき方式蓋とれらし

○塗蓋ちゞきこえ合らし　横よてつ人あく

一茶杓　竹　象牙　折タメ　二重マケ　長茶杓

利休より以来竹茶杓ニ究り茶杓の居かハ

貝先　中合　節裏　節メ　移り

左振　カスリ形　タメ下　切留ニ二色あり

一

道安茶杓の紅吟のよし

左（サ）ト右（ウ）下（カ）右（ウ）ト左（サ）下とて二流へよ

是を茶杓乃極秘なりけり

○茶杓のりのよう　古人年茂林宗源紫人書見ん

中ゆよ象牙の茶杓式正のよう　竹茶杓ハ

黒谷のよし　長茶杓ハ　先墨天目又用意之

の具なり 銘手ハ茶碗ニ用ル竹茶杓周徳と
云者削 初羽倒秀慶と云者へ竹遣して削らせ
由 竹茶杓習をこめ候処一段能候て利休
よく好ミし由
茶杓の筒 但シ一通の物ニ限ル寸小刀目木蓋物と
全同様にすへし様にする物し
一 香合 古 金 竹 木 貝
其外 和漢 蒔絵 彫物 用ル由

塗香合 紹鷗ハ黒塗 利休は様ののまゝニ唐ニ蒔
乃蒔絵好ミし由有之
○香合の大なるは伽羅多く入 小キ香合ニ
黄語て他入ましして指物の事紅茶し
堆朱 作し方
浅周 存清 張成 楊茂
殿藏 周明 七官 元祐
呂甫

品
堆紅　剔紅　堆朱　金朱
金黒　堆漆　堆烏　金糸
アヌ金糸　桂漿　紀録系　松皮
九連糸　ハコカ彫　堆黄　金馬 焉丸
青貝まては
不究　厚貝　小京貝　螺幸
ソヒカウ　メヽ貝　相貝　砥トキ出シ

一　角貝　螺貝
深付　是ハ香合よりさヽき茶碗抔
　　　抔皿鉢口木香炉まくも
金襴手　口紅彩　雲龍　紋手シボ
玉子　竹葉把　祥瑞　絹庭メイ
呉須ゴス　赤絵　錦手　内禿ハゲ
安南　雲竹梅　宋胡録　冠手
牛馬手　伊万利焼

一　三羽

鶴　日かゝり　大鳥　鸛(カウ)の羽は

鵁(アヲサキ)

右しかは鷹野鷹に添来ても用は

一四羽　二ツ羽　五枚重　尾筈とて有しは

一四羽は古来より風切はきとは二ツ羽五枚重に

結まはりのそては尾筈へよ濫なるのとよ飾りは

筆そろへし也

○二羽中ひ結の事

一 三ツ羽ともの筈羽の下又寸より五寸五分までのうち

一 柄乃下三寸よりも三寸五分まで筆乃皮にて包右羽を

右の方へ左羽を左の方へ折返すへし

一 三羽ともの中をちらしさして結ふるもよし

一 ありきたる羽はおしらくの皮にて深(深行)くみりやりして

羽は三行のかけて包む事

一 五枚ともねの羽をちらしきまて結ふへし

一 結様何れも二所又三所結しかり結めは筆の皮

苧紙こよりにても出そ

一尾まて結ひ羽帚のとめを下へ折返るゝ

一四羽帚の羽よし肩より四つめ又四つ目の羽よし

長サ八寸六分一二分まて柄の長サ三寸又分三寸七分

まて結め三所之結ハ折之へ三寸ニ結様二分三分置く

切り落捨るなり

一水次　　金古木

片口風炉囲燒裏にても客の方へ口をする

一水瓠　同し

合子　号名　トメ切　亀ノ蓋

引切　緑桶　棒の先　弐寸口

○合子ニ花入る事ハ有しこへ大雑へ抛也

○めんつうハとちめ宗二ハ向ふ宗及ハ左宗易

緒子の方へなり

一蓋置　金古竹

甫也　下判　隠家　五徳

かま　まるご　太鼓筒

竹ふたも竹節を八ツ切とん遣ひ候由

○釜の蓋京にてハ八ツ切なとし樋の方持よ

の方よこ様のよし

五徳の蓋亜自在擦の時用ゆ南也香炉

わしらハ口傳かくしもてハ

一風炉先屏風

一勝手屏風　大形綱代

一天目、

玳玭盞　曜星　建盞　油テキ

揃ノ　徽子灰被盞ハイカツキ　只天目

黄天目　黒ノ　白天目　夕陽

一茶臺

入間　臺三段内完上とし　数七ツをかし　尼崎　朱まて桙ちち一ツ一文字あり　あらつきま角あり数十三をし

蜈　朱まてむらての去ありま　あらつき丸（ちり）数十を掛し　赤臺

貝臺　唐本臺

竹臺　グリ臺　堆朱臺

一茶入盆

杉木　四方　堆朱　内赤

若狭　青貝　唐蒔絵　丸

此外ニ蒔絵塗物香合の下ニ委記之

一長盆

一大圓盆 香氏

一柄杓指。　古金

一茶筅臺　古

一擔筒　桐　銅代

一志つけ棚　勝手の

一茶箱　二種入　三種入　桐ニて中継のあし

二種なれは茶入と茶わんと入也茶筅を数寄屋囲へ入る

わらひをあつてよし

一自在　竿ひかうき　小さ法

○自在くさりの名所の事

一　服紗　袷字

羽二重　志ゆす　小絹

○服紗寸法しるし

一　九寸五分より一尺五分

一　九寸より一尺

一　壱尺より壱尺五分

是ハ寺沢家流

一　九寸四方

是ハ吹雪包

一　薫き物

古来より　勅方乃六種

梅花　荷葉　菊花　落葉

黒方　侍従

此通用中ニ焼候て比外乃蝿(?)もと一焼

弖用ニ申近衛應山公之以由居安以芝書ヨ相尋候て以由

勅本類聚雑要抄ニ曰

○六種薫物　勅方之事

梅花

沈香 弐両三歩二朱　占唐 三朱

甲香 壱両弐朱　甘松 弐朱　白檀 五朱

丁子 三分弐朱　麝香 四朱　薫陸 弐朱

荷葉

甘松 小三朱　沈香 小三両三分　甲香 小壱両壱分

白檀 小壱朱　欝金 代麝香 小壱分　丁子 小壱両壱分

藿香 小弐朱

菊花

沈香 四両　丁子 弐両　甲香 壱両弐分　薫陸 六両壱分

麝香 弐分　甘松 壱分

落葉

沈香 四両　丁子 四両　甲香 壱両弐分　麝香 弐分

香附 三分　薫陸 壱分　白檀 壱分弐朱 或三朱

蘇合 壱両

侍従

黒方

沈香三両　丁子壱両弐分　甲香壱両三朱

薫陸五朱　白檀五朱　麝香壱分三朱

各両目雖格秘書付早免拾口伝

一　熊縁香　勅方

沈香拾両　甘松五両　白檀壱分　鬱金弐分

丁香壱両　麝香弐分　熊胆壱分

右七種何も細末シ車前子五両を煎汁にして其汁にて煉やうは右之両目壱分とは壱匁ほとにて中茶

壱両四匁ほとにては

一　伽羅　削様なよひまをしゆし

一　清乾

白檀壱両　沈香壱両　麝香弐分五厘

右三色蜜にて煉沈を□これ程よまりするよくは

志うしおりし好味身あしされひうまくまりそれも

熊は大小とんろ方よいゝうしは正親町院へ大閤御作

右日野大納言と申人御作ニ候也

一 手巾

〇手巾之事

一 布きぬ三ツニ折一分すて二寸分角ときこと合にすくれてきぬぎもて究竟の一ふを入組しつらへ尤縫代入すしまねひ申也少ゟ有り

一 柄杓 風爐 坊

〇柄杓古来よりの作者

聲阿彌 夷堂

春泉坊 アミ戸

仙三郎 一阿彌

〇柄杓寸法之事

一 風爐の柄杓ハたけ〇六寸より七寸までの内 囲炉裏の柄杓たけ〇七寸より八寸まで

一 柄杓のかうのわたり二寸 八分又二寸六分とも有り

かうの高サ分寸のあいあり 柄杓乃柄乃さし込

下よりさき寸さき分柄の長サ節よりさき先くらの際まて
五寸五寸半節より末五寸八分寸皮目まて寸法
九へし
一 月形ハり口ハ四ツ目より上け下さ三分より四ツ
乃内吉
一 柄の切様風爐の柄杓ハ皮目の方か近て切なり
囲炉裏の柄杓ハ大形まする切皮目の方をかし
詰て切吉名人ハかしつきかこれ三ツ角きしり

爲あるしゝかしは
一 掛竿
一 きやた川
一 爐ぶち　直より赤地　切より塗　丸も
○寸法 法高三寸さもよもり 織部の炉ハ広し
一 炉縁
○古禮まつへ如く らさる茶の湯かゝ爐ふちて
四方もく手さ作領ら名物の茶器乃人

一小板

右敷法ハしらす通迠寸法ニ書并敷方

諸器置しき物三つよ有之へし

○右三品の板客の方亭の目すく二不定也

一棚

袋棚　違棚ハ袋棚　荘棚奈　水指棚

竹棚　丸棚　三重棚の棚　桐棚

紅猪棚二色　棗山棚

一風爐、　土　銅　鉄

遠足　軸足　垂　透木　欄干

○寸一丁京良宗四郎寸二寸後厨子寸三

鉄茶四尾銅寸五土佐焼を用ゆを年淋て

面白きとて深草焼を俗人用ゆ

○透木寸法しま

長サ弐寸五分よ法よし

幅九分よ和志

厚サ五分ほと有し

一 几帳　色々作りの方ニ掛る

御所ニ掛ル之とも利休好の形あり又古くるの紙も厚房結構なりまやしく取扱ふ望の内ある同前の外あり

一 砂糖入　木　土　洞

一 さじ　朝鮮さはり

一 湯次　金　木

一 水継　土　金

一 湯杓柄

一 香薫盞　香薫ハ祇園のとうれ上とまる

一 湯盆　同し

一 茶菓子盆

○雑木之盆ニ好ミて用ル事も有之し　葉岩

ニ切り

○茶菓子ニ枝柿串柿ころ柿頭柿木の実ね

物之茶味面白きに着るなし

一楊枝　黒もじ　杦
一箸　杦角を削る
一間鍋　前ゝ
一盃臺　高麗　雲鶴　かけ目　三嶋　染付
一打敷　前ゝ
一通盆
一棗家具
吉野　朱　丸　織部　一文字
利休　碁子　面桶　編廣
宗和　大徳寺　友棗
一皿
一猪口
一[illegible]
一幕　まし　つひ
○ちり穴の上ようみて〻塵穴のさし渡し
須乃寸法地形によるも幕の先とある所にて下直しても

一げた　角丸

一草履　雪中にハ源皆を用ゆへし

一雪走

○琉球莚を用ひ石畳の上に張し花莚ハ上を

さしよふよし　かたく掛（手をたけぬ掛）

一砂すり　形ハ好ミ次第

一履箸　寸法あり

一湯桶　花塗桶をも用

一筆架

一本灯臺　一尺三寸の丸臺の蝋燭桐柾木臺杉のまさめ

一釣灯がい　桐の木地也

一短檠箱　黒塗　ため塗

桐の上の穴ハ利休妻女抱数寄屋のよし

一竹炉　臺けやき

一紙炉　内のハ木地　外のハ塗

一本炉籠　蓋も桁本よりのせ本地よりも塗
くろしろ年々しき由　東山殿を原とせし

一石燈籠
○並ニ武州ちと用三ツを打ち掛之内ニ星の
石入にすめ不付三ツ
一洞燈籠　絵あひの物
一手燭
○及黄昏庭前へ出ル時ハあるしめし亭主持出ル時
お客柄の方を向ケてもれハ我方へ火の手を向ル事
○華焼へ火を入候時ハまし方柄の脇よ亭主へ
茶会の時手燭も出す時ハ才一のあてある庭前之
物まへ念入て仕るへし
一石手水鉢
○めんの石ハ四方より見立ていとあさく深く
それもあり
○石よりも先此せし潰れすの内外源へすの内外の
○雪中よりは鉢の上へ雪そろへ残りあり大雪
すりへ柄杓可入入へし

右花筒魚籠三ツ共手の書付之花林宗源
以前寄之

一 煙草盆　唐火入　煙草入　唐吹一さし

一 絵合の唐臺

一 絵合硯箱　筆一本　墨一挺　杉原紙の文紙

一 花　梅え
梅の外何にても
一年の花の名残とて賞翫いたし候

残菊　さきのむ　とうきのめでとう　花の外
張菊
早梅　水仙花

山茶花　寒菊　紫の白紫しうゑと　あんしょういたし候
山椿　白玉椿なと賞翫いたし候
冬至梅　冬至のころ
金銭花　めでたき柳
藤のとし　まゆたんき
百合　花
右の花とは別て格別賞翫申候由ニ
書付申候

一数寄の賞花の事　作様事ありといへとも難尽

一花切

一花盆

〇客よ亭主の時に亭主の足おとにのせておきて

花ハ花切花の下に頭よ巾添ておきて

一花の水継

一蝋燭　いかにも

一油　水せし

又年寄ハ燈ハ油のともすこと今ハ油煙

茶て参しや

一組燈心　五筋組　三筋組　二筋組

〇燈り火の余に晴への赤かれハ石硯難きもの

ありしかしまするよし

一火皿　侘て土器にて

一竹箸

一下皿

一 油次

一 うきさし　古竹

一 茶志やくご　楊枝

一 茶筅筒

○右は数寄にて茶巾茶

今茶にて入用書如斯

夏の茶之の道具太郎冠者にて能ク可致

一 水屋道具

手桶 一対 柄杓 すいのう 柄杓 洗桶 大小二ツ

大水瓶 釜蓋 桐にて

大手巾 茶巾 引ちがへ

灰蓋 花切酒 夜の物

花筒 夜の物 大服紗 ね二つ

大羽箒 花箕

如雨露

一 茶の湯ハ人の茶乃湯にあつかはるにも第一に入用

を能知て能用ことを放出しやハしうけるとまかする也
熟して不自由も事ニ需して曲て入ゆう黒ふ曲め
て事ニ入ゆう黒ふき兎角不自ニ皆ハ方扱を知
へき事也ハひくき方前ニなるへしとなきて物りよう
面し

此一冊者徹ニ數寄道具之底も知而も又一日
し會ニ携ハ口器不残書付ル一毛ニ法
才漫ニ他見御用捨不作ル不思議得閑
暇秋夜向燈擡之入清覧ル
也

丙戌
菊時下旬

茶具圖

全

挽木ノ箱

詰箱

手水柄杓

ういけ

庵 椶櫚ノ葉箒

同蕨箒

露地あんどう

木燈籠

サウリ

ケタ

チリハシ

カシ桶

ゑこし

井筒高サ弐尺三寸
栗丸太長サ四尺七寸
上下ツノハ出ハ五寸ツヽ
腰板板高サ
八寸八分
厚サ
ケツリ立四分
横竹一本ツヽ入
上下ノアキ
フリワケ
竹ノ目ヲ揃ニシテ

網代笠形ナシ
真竹ノ皮ヲ以造
一名ニ
法性寺
笠ト云

菅笠イカラヲ以造
又ハ竹皮ニテモ造ナリ

真幢表背上下廻シ

三幅對之中必ズ此之表具ハ象牙撥軸ナリ
又ハ黒塗唐木ニテモ此時ハ撥軸之物ナリ

幢表背横物

繡表背一文字無押風帯

臺表具

掛緒ナリ
啄木ト云

茶籠

組物

蓋

瓢

筥炭斗

蓋

滄倉彫香合

内外金ニ冬胡粉ヲ以
菊ヲ画上ケニ
絵書白ハ
シワウ々

右
上皇ヨリ利休ヘ献上ノ写也

堆朱　剔紅　堆紅
金糸　九連糸
黒金糸　堆漆　紅花
緑葉
桂漿
犀皮
堆烏

屈ク輪ル

作者　張成　楊茂　周明　金渊
呂補　銭鎮　張源　王員　柳成
永薫　王銘　呂家　戚斎　王丹
雲載　存星
銭夢　王誠
珪璋

青貝香合
唐上作　劉紹緒

侶路形香合

利休形香合

少庵形香合

南京染付屏風筥香合

長汰利

鶴ノ一声

桃尻

みゝなし

黄瀬戸
立鼓花入

柑子口

住吉形

白銅

竹釣舟

魚耳花入本青地

尺八切

一重切

二重切

籠花入

右同

釣瓶水桶

支同

真ノ手桶

釣瓶水指

曲水指

盞玉ら

大揃猪口ホド

カメノフタ

臺子

南ハン以巾

メンツ

及臺子

竹臺子

厨子棚

高麗臺子

袋棚

紹鷗棚

角棚

丸卓

紹鴎形

利休形

大中小有

面中次

雪吹

大小有

道安

いヤロウ

茶器

金輪寺

丸椀之形

一文字椀之形

上り子之形

端廣椀之形

精進椀之形

同食椀

呑筒椀之蓋

同食椀

面桶椀之図

同蓋

吉出椀

菓子椀

利休巾籠

利休以巾

八徳

二千分

右同

鉦鐲

撞木

拂子

喚鐘

スチンコ

旅簞笥之図　内ニ棚二重アリ

菊燈臺

掛燈臺

同竹

宗旦好

本燈臺

油ツキ盞

油ツキ

下皿

油盛

片口
大中小
三ッ宛
松木地

茶巾洗

釜居

炭箸

炭臺

張文庫

同硯

勝手溜張ノ棚

肩衝

茄子

文茄

手瓶

絃附

文琳

リこ

丸壷

瓦膨

酒次錫

注子

セン
カンヒヒ

羽田陰

古金襴

一 鶏頭　丹地ニケイトウノ立木

一 麒麟　コイ萌黄地ニキリンノ紋

一 花兎　ヒラウト地ニ花ウサキ紋

一 鴛鴦　萌黄地ニヲシ鳥ノ紋

一 長楽寺　丹地梅鉢地紋花紋ニ龍ノ丸

一 大唐　丹地唐花地紋

一 富田　丹地雲ニ宝ヅクシ

一 鳥ノ丸　紫地小石畳地紋花紋鳥ノ丸

一 細カキ　ユイ花色地ケンカキ地紋龍紋縫ノ丸

一 角龍　薄花色地ニ角龍

一 大内桐　丹地茶地桐唐草

一 安楽庵　ヒラウト地牡丹唐草又丹花色ニ宝ツクシ

一 高台寺　萌黄地牡丹唐草

一 金剛　ユイ浅黄ニアヤスキ白糸横筋織出縫ノ紋

一 紺屋　色地鱗形ニモ円ツ割テ小鱗形アリ

一 駒石畳　萌黄地ニ小石畳

一 大徳寺切　白地ニ花ト石畳駒分

一 淡路切　紺地アヤスキニ桐ノスヘ紋有

一 円悟切　白地牡丹唐草

一 一条院切　同紋

一 千葉切　白地縫ノ丸

一 京屋切　茶地牡丹唐草

一 坂田切　紺地牡丹唐草

一 薬山切

一 和久田切

一 権太夫切

一青木廣東　五色ニ筋有白糸横筋コシ留リ有

一鎌倉廣東　赤地白糸萌黄糸立筋又横筋有

一安積廣東　立筋白糸花色糸立嶋横白糸脇留リ

一浮ニ島　白赤カハ糸ニテ小コウシ嶋

一生駒廣東　地色茶横嶋ノ糸花赤糸白糸ノ織分

一朝倉廣東　赤地白糸ノ立織留リ内ニ唐子ノ小紋有リ

一中尾廣東　白糸赤糸小コウシ嶋織分ハ白糸

一芳野廣東　萌黄地五分ホトリ太サノコウシ嶋立横ノ糸白カハ

一織廣東　白地コウシ嶋立横ノ糸カハ

一紹鷗廣東　赤綿小嶋立横花色地

一有楽廣東　赤綿花色地白糸太糸立筋

一木下

一住友

一宗薫

一高木

一田色

一通種

一小松

一 名物

一 山田

一 宗有

一 大円

一 高臺寺

一 勝光

紙子ノ分

エノミ色水ニ唐草ハイ形

一 木ノ下　花色地白系ニテ秋野ニ草花青海水

一 正法寺　地萌黄梅ユイ淺黄系指擦唐草

一 白極　花色地細ニハ香宝ツクシ

一 宗薹　花色地縞違ノ内ニ梅形

一 住吉　花地茶ホソ縞段系ハカバ

一 清水　地ヒワ色崖ニ白系梅花柳ノ形紋

一 本能寺　ヒラウト地青海ノ花唐草丸ニ宝ツクシ

一 ウズ　地唐茶白系茶系花色ウズノ紋

一 花縞違　花色地ニ白系ニテ花縞違牡丹ノ花織分

一　荻種　　花色地ケシ菱地梅折

一　紹巴　　ユイ花色地白糸ノ細雲鶴ノ丸

一　紹幸　　花色地白糸ノ菊唐草

一　吉兵衛切　　御地白糸ニテ萬字クヅシ

一　亡草　　花色地茶糸唐草ニ雲鶴ノ紋

一　紹鴎　　花色地テツセンニ唐草詰ノ紋

一　海馬　　白地小麻子小紋ニ龍紋カイバ

一　定家切　　薄花色地桔梗唐草

一　米市切

一　吉徳切

一　須妙寺切

一　細川切

一　芝山切

一　宗粉切

一　角屋切

一　荻元切

一　今泉切

一　紹谷切

一筆絵